

【報告】

ニュージーランド・オークランドの多言語性と 英語に対する印象

早川 治子

The Impressions of the English Language and Multilingualism in Auckland

HAYAKAWA, Haruko

要旨：文教大学文学部1年の授業の初めに学生に「日本語と聞いてどう思うか」との質問に、記述式で回答させると、「日本語は難しい」と答える学生が多い（早川 '07）。日本人には「日本語は難しいものだ」という考えが強いようだ。他方、英語話者からは自分の母語を難しいという意見は聞かない（ような印象を受ける）。母語に対するイメージはそれぞれの母語によって異なると想定される。この仮説を検証し、その形成過程を探るのが共同研究：「日本語母語話者の母語に対するイメージとその形成－英・韓・中国語母語話者と比較して」（共同研究代表、早川治子）の最終目的であるが、本稿はニュージーランド・オークランド地域で行った英語に対する印象を問うアンケートの第1段階の内容分析である。結果はモノリンガル、セミリンガル（英語も話すが流暢ではない人々）が英語を難しいと考え、反対に、バイリンガルである人々は難しいと考えていないというものであった。

キーワード：多言語、多民族、共通語、バイリンガル、モノリンガル

はじめに 日本母語話者に対する日本語調査の概略

前述のように本調査以前に日本人に対して日本語の印象を聞いている。

その調査の概略を記す。

この調査は2005年4月の文教大学の一年次の授業参加者83人、2005年9月府中市女性センターの参加者23人を対象としての小規模なものであるが、日本人の日本語に対するイメージの一端がわかる。文教の調査は、おおむね18歳から20歳ぐらいまでの日本人学生である。府中市女性センターの参加者は年齢は不明であるが、だいたい50代から60代と推定される。「日本語と聞いてどう思うか。5つ答えよ」という質問である。

文教大生83人のうち40人：48.2%が、センターの受講者23人のうち14人：60.9%が、それぞれその「難しさ」に言及している。これらモノリンガルが多数を占めると想定されるアンケートの回答者の半数、またはそれ以上が日本語は難しいと思っていることになる。

1. ニュージーランドの多民族性

ニュージーランドは多民族国家であり、いたるところで「民族性」：“Ethnicity”を問われる。2006年度の国勢調査¹⁾では、ヨーロッパ系が約68%、先住民族マオリ人が約15%、「ニュージーランド人」と認識する人が約12.9%、アジア系は9.2%、太平洋諸島系6.9%であり、最大の都市オークランドは特に多民族都市である。

言語的にも、ニュージーランドは英語が共通語として使用されている国ではあっても、マオリ語も公用語として認められている国なのであり、公文書は英語、マオリ語2ヵ国語表記となっている。

このような国においての英語に対する印象の分析はその多民族性、多言語性を踏まえたものとならざるをえない。単純な英語母語話者の分析というよりも、英語のみを母語とする話者（モノリンガル）、英語と他言語が流暢な話者（バイ・マルチリンガル）、そして他言語母語話者であるが英語も使用する（セミバイリンガル）3者の比較となる。

2. 調査方法

以下の資料のような調査用紙を調査員（オークランド大学の2年次の学生6人）が、被験者に個別に配布し、回答、回収した。

日本語版の調査用紙は、「日本語と聞いて、どう思うか」という簡単なものであったが、英語版はニュージーランドの多様性を考慮し、①Sex（性別）、②Age（年齢）、③Occupation（職業）④Grade（学年）、⑤Major（専攻）、⑥Mother tongue（母語）、⑦Ethnicity（民族性）の項目を設定し、被験者の属性を詳細に記述してもらった。なお⑥Mother tongue（母語）を英語とした者でもバイリンガルがいることを想定して、“Completely bilingual in English and ()”という設問をして、英語以外の母語のあぶ

[資料] 調査用紙

Sex	F / M
Age	-17 18 19 20 21 22-30 31-40 41-50 50-
Occupation	Student / non-student
Grade	1 st yr 2 nd yr 3 rd yr 4 th yr Hons MA PhD Others
Major	
Mother tongue	() Completely bilingual in English and ()
Ethnicity	

What is your impression of the English language? List five.

1. _____

2. _____

3. _____

4. _____

5. _____

り出しを図った。

「日本語と聞いてどう思うか」という質問文は英語母語話者と相談の上、逐語的に訳さず“**What is your impression of the English language? List five.**”と意識した。

これらはすべて英語で書かれ、英語で回答されたものであり、対象者はバイリンガル、マルチリンガルを含むが、すべて英語話者であった。

調査場所は特に指定せず、大学構内、調査員の住居と様々である。調査日は07年7月23日から25日までである。回収総数は400枚である。

以下回答者の属性の数量的分布の概要を記述する。

3. 属性の数量的分布

回収調査紙総数400のうち、表1で示すように、女性（Fと略した）が234名、男性（Mと略した）が165名、無回答が1名であり、女性が男性の約1.5倍近くを占めるデータである。

年齢構成は表2で示すとおり大学生の年齢である18歳から21歳が最も多く、総数で284名、71.0%を占める。

被調査者は学生が最も多く、90%近くを占める（表3）。

また学生の学年別では表4にあるように、学部の1年が最も多く、次いで2年、3年と続き、これらで全体のほぼ80.0%を占める。

質問項目⑥の母語をたずねた結果は表5のように予想通り、回答が多岐に渡り、英語を母語とする者が56.0%（224名）を占める反面、英語以外

表1 性別

性別	人数	比率
F	234	58.5%
M	165	41.3%
無回答	1	0.3%
計	400	100.0%

ニュージーランド・オークランドの多言語性と英語に対する印象

表2 年齢

年齢	人数	比率	小計	比率
17以下	6	1.5%	6	1.5%
18	70	17.5%	284	71.0%
19	77	19.3%		
20	95	23.8%		
21	42	10.5%		
22-30	76	19.0%	110	27.5%
31-40	10	2.5%		
41-50	14	3.5%		
50以上	10	2.5%		
計	400	100.0%	400	100.0%

表3 学生か否か

	人数	比率
学生	356	89.0%
学生以外	44	11.0%
計	400	100.0%

表4 学年

学年	人数	比率	小計	比率
1年	122	30.5%	320	80.0%
2年	102	25.5%		
3年	96	24.0%		
4年	26	6.5%		
オナーズ	2	0.5%	80	20.0%
修士	10	2.5%		
博士	4	1.0%		
その他	20	5.0%		
無回答	18	4.5%	80	20.0%
計	400	100.0%	400	100.0%

を母語とする者が44.0%（176人）を占める。英語以外の母語としてあげられたもののうち4名以上の回答者があった言語を表5に記した。それ以下の人数の回答者を含めるとその延べ数は33言語に上った。

英語を母語とした者でも表6に示すように、そのうち69名が英語以外の言語とのバイリンガルまたはマルチリンガルであり、その種類は25種の言語に上った。つまり、224名の英語を母語とする者のうち英語のみを使用言語として認識しているものは155名、（69.2%）であり、69名（30.8%）は他言語とのバイリンガル、マルチリンガルであることになる。

英語を母語とする者で英語のみ使用言語として認識している者、155名はこのアンケート回答者、400名中の38.8%にあたる。つまり10人中4人

表5 母語

母語	人数		比率	
英語		224	56.0%	
広東語 ²⁾	33	80	44.0%	
北京語	30			
中国語	17			
韓国語				23
マオリ語				8
日本語				7
サモア語				7
トンガ語				7
ヒンディー語				4
タミル語				4
その他				36
計			400	100.0%

表6 英語を母語とする者と他言語

使用言語	人数	比率	総数400人中における比率
英語のみの者	155	69.2%	38.8%
他の言語併用	69	30.8%	17.3%
計	224	100.0%	56.0%

表7 民族性

民族性	人数	比率
中国系	82	20.5%
ニュージーランド人	79	19.8%
ヨーロッパ系	31	7.8%
韓国系	29	7.3%
台湾系	18	4.5%
マオリ系	17	4.3%
インド系	16	4.0%
アジア系	10	2.5%
その他	118	29.5%
計	400	100.0%

近くが自分を英語のみを使用している者と認識しているが、その他6名は主要言語か、主要でないかの差はあれ、他言語も使っていることになる。

民族性は、表7に明らかなように、自らを中国系とするものがニュージーランド人、ヨーロッパ系よりも多い。オークランドの学生の生活範囲においていえば、5人に1人（20.5%）が中国系なのである。これに台湾系4.5%を加えれば4人に1人（25.0%）が中国系と言える。

4. オークランドの多民族性と言語

2006年のStatistics New Zealand TATAURANCA AOTEROA³⁾に

オークランドはニュージーランドの中で民族的に最も多様性のある地域であり、56.6%がヨーロッパ系、18.9%がアジア系、14.4%が太平洋系、11.1%がマオリ系である。

(翻訳早川、以下同じ)

とあるように、オークランド地域はニュージーランドの特色である、多民

族化の最も進んだ地域であり、5人に1人がアジア系である。特に若年層のアジア系が多い。このことはこのアンケート結果に色濃く反映している。

オークランド地域は多民族地域であるが、ただし、各民族間でコミュニケーション不能という地域ではない。ニュージーランドでは95.9%の人が英語を日常語として話す。Statistics New Zealand TATAURANCA AOTEROAに

オークランド地域は最も高い比率で2言語、またはそれ以上の言語が話せる人々の住む地域である。

とあるようにオークランド地域は、最もバイリンガル、マルチリンガルの多い地域である。

オークランド大学の大学生に限って言えば、留学生として入学する場合は学部TOEFL550－625点、大学院575点⁴⁾が必要とされる。留学生ではなく英語を第1言語とする学生でも英語力を査定するDELNA（Diagnostic English Language Needs Assessment）という試験を受け、能力が足りない場合は、英語の授業をとり、単位化されるということである⁵⁾。

5. 英語に対する印象の分析

ここではまず回答者全体の英語に対する印象を探る。

印象として5つリストアップする際の第1番に挙げられたものを第1レベルと名づけ、その使われている形容表現を手がかりに、5回/人以上出たものにかぎり、表8にまとめた。しかし、例えば“difficult and complicated”のような表現は“difficult”の項目と“complicated”の両者に入れた。つまり、人数は延べ人数であり、総数は400人以上になる。

5人以上答えた印象が18項目あり、これらで全体の63.5%を占めている。延べ数ではあるが、半数以上がこの18の形容表現に収束することがわか

る。

“easy” が12.5%で第1位であり、8人に1人が易しいと答えたことになる。しかし、「難しい」「hard」という答えも第2位を占めている。これは8.3%で“easy”の3分の2程度で、かなりの差が認められる。しかし、第3位に“complicated”、第4位に“difficult”と続き、形容表現は違うが、「難しい」、「複雑だ」と考える人もかなりいることになる。第5位の“universal”というのとは世界共通語として使われる英語に特徴的な表現と考えられる。これは日本語に関して出てこなかったものである。

ここでまず特徴的に出てきた「易」「難」そしてuniversalに代表される

表8 主な印象

順位	印象	第1レベルに書いた人の数	アンケート総数400に占める比率
1	easy	50	12.5%
2	hard	33	8.3%
3	complicated	27	6.8%
4	difficult	23	5.8%
5	universal	19	4.8%
6	wide(ly)	10	2.5%
7	simple	10	2.5%
8	useful	9	2.3%
9	good	9	2.3%
10	complex	9	2.3%
11	global	8	2.0%
12	world (wide) (language)	8	2.0%
13	interesting	7	1.8%
14	confusing	7	1.8%
15	different	7	1.8%
16	like	7	1.8%
17	common	6	1.5%
18	important	5	1.3%
	計	254	63.5%

「共通性」に注目してみる。

方法としては語彙を英語の①「難」と②「易」、そして③「共通」に属するものをそれぞれ3グループの語彙群に分類した。①「易」に属するものとして、“easy”、“simple”、②「難」に属するものとして、“hard”、“complicated”、“difficult”、“complex”、“confusing”を、③「共通性」に属するものとして“universal”、“wide”、“global”、“world”、“international”、“well known”とし、表9に再集計する。

このようにこの3グループの語彙群で全体の53.0%を占め、「易」「難」そして「共通性」が英語話者の英語に対する印象の主要な部分を占めることがわかる。グループの順としては「難」が最も多く、25.0%、次に「易」が15.0%、「共通性」が13.0%と続く。つまり英語の印象をきかれています。思うのは「難しい」、「易しい」、そして世界「共通」語だということである。

表9 英語話者の特徴

印象		第1レベルに書いた人の数	小計	アンケート総数400に占める比率
易	easy	50	60	15.0%
	simple	10		
難	hard	33	100	
	complicated	27		
	difficult	24		
	complex	9		
	confusing	7		
共通	universal	19	52	13.0%
	wide(ly)*worldを含まず	10		
	global	8		
	world(wide) (language)	8		
	international(ly)	4		
	well known	3		
計		212	212	53.0%

表10 難易に注目してレベル1から5までの比率

印象	易	難	計
	easy/simple	hard/complicated/difficult/ complex/confusing	
レベル1	60	100	160
総数400に対する比率	15.0%	25.0%	40.0%
レベル2	45	75	120
総数400に対する比率	11.3%	18.8%	30.0%
レベル3	36	59	95
総数400に対する比率	9.0%	14.8%	23.8%
レベル4	31	55	86
総数400に対する比率	7.8%	13.8%	21.5%
レベル5	21	47	68
総数400に対する比率	5.3%	11.8%	17.0%
計	192	335	527
総数2000に対する比率	9.6%	15.9%	26.4%

本論ではまず「難」と「易」に注目してレベル5までの分析を行う。日本語においても「難」というのが印象として最も多く出たものであったからである。結果、表10が得られる。

レベルごとに件数は異なるが、レベル1では40%の回答者が難易について言及したことになる。その比率はレベルによって変動はあるが、総計でも4分の1以上の回答（26.4%）が難易について述べたことになる。また常に「易」：「難」の比率は「易」3に対して「難」が5以上であり、「難」と考える人々が「易」と考える人々の1.6倍から2倍以上に上る。

6. 英語話者の分類と比較

ここまで英語話者を一括して考えてきたが、以下、英語話者内の英語のみ話すモノリンガル話者、英語と他言語バイ・マルチリンガル、他言語を母語とし、英語も共通語として話すセミバイリンガル話者間での英語に対

する印象の比較を行いたい。一口に英語話者といっても生まれてから英語のみで生活している者、第2言語として英語または他言語をマスターした者、英語をマスターした、マスターしつつありながら、未だ母語のほうが優勢である者、それぞれに英語に対する思いは異なると考えられる。

混乱を避けるために、英語使用者を表11のように分類する。

まず英語話者というのは今回の調査で調査対象者となった人々全体400名を呼ぶ。この英語話者は以下4グループ：A、B、C、Dに分けられる。Aは調査用紙の⑥mother tongueの第1欄部分に英語と記入し、Completely bilingual in English and ()の空欄に何も記入しなかった者（英語モノリンガル）である。生まれてから英語のみを使用してきた者たちである。Bは英語が第1言語で他言語も流暢なバイリンガルまたはマルチリンガルで、調査用紙の第1の欄に英語と記入し、第2のCompletely bilingual in English and ()の欄に他言語を1種またはそれ以上記した者である。例えば、生まれてからは英語の環境にあったが他言語も問題なく話せる、または英語を母語として認識してはいるが、他言語をも使用することにも問題がない者である。Cもバイ・マルチリンガルではあるが、他言語を母語と認識している者である。調査用紙のmother tongueの第1の欄部分に他言語を記入し、第2のCompletely bilingual in English and ()の欄に英

表11 英語話者の分類

名称		内容	mother tongue1	mother tongue2	人数	総数400に対する比率
英語話者	A：英語モノリンガル	英語を第1言語とし、英語のみ使用する者	英語	空欄	155	38.8%
	B：英語バイ・マルチリンガル	英語を第1言語とし、他言語も同程度にできる者	英語	他言語	69	17.3%
	C：他言語バイ・マルチリンガル	他言語を第1言語とし、英語も同程度にできる者	他言語	英語	103	25.8%
	D：セミバイリンガル	他言語を第1言語とする者	他言語	空欄	73	18.3%
計					400	100.0%

ニュージーランド・オークランドの多言語性と英語に対する印象

語を記入した者である。例えば、生まれてからは他言語の強い環境にあったが、英語も問題なくマスターしている人々である。Dは他言語が母語であるが英語を共通語として使用する者である。調査用紙の第1の欄に他言語を記入し、第2のCompletely bilingual in English and ()の欄は空欄だった者である。英語を共通語として使用できるが、英語の完全なバイリンガルとは言えない人々である。例えば、他言語環境からこの国に移住してきて英語をマスターしつつも英語の使用をバイリンガルレベルとは認識できない人々である。この人々を便宜上セミバイリンガルと呼ぶ。

モノリンガル、バイ・マルチリンガル、セミバイリンガルの間で英語に対する印象はどのように違うのであろうか。

まずA：英語のみ使用者（英語モノリンガル）で難易に言及した人の数の英語モノリンガル総数に対する比率を見、次に難易言及者内での比率を見る。

表12のように英語モノリンガル話者の43.23%が英語の難易について言及し、「易」8.39%に対し、その4倍以上の34.84%の人が「難」だと考えている。モノリンガルの人々は半数近くが英語の難易に注目し、難しいと考える人が大変多いことになる。

表12 A：英語モノリンガル（155人）の印象

印象		人数		比率	
		個別	グループ別	モノリンガル総数 (155人) に対する	難易言及者(67人) に対する
易	easy	9	13	8.4%	19.4%
	simple	4			
難	hard	13	54	34.9%	80.6%
	complicated	14			
	difficult	16			
	complex	6			
	confusing	5			
計		67	67	43.2%	100.0%

表 13 B:英語+他言語バイ・マルチリンガルC (69人) の印象

印象		人数		比率	
		個別	グループ別	英語+他言語バイ・マルチリンガル(69人)に対する	難易言及者(21人)に対する
易	easy	13	13	18.8%	61.9%
	simple	0			
難	hard	4	8	11.6%	38.1%
	complicated	2			
	difficult	0			
	complex	1			
	confusing	1			
計		21	21	30.4%	100.0%

では英語も他言語も使用できるB英語+他言語バイ・マルチリンガル話者はどのように考えているのだろうか。表13に記す。

B:英語+他言語バイ・マルチリンガル話者はこの4グループ間で最も難易に言及する者が少なく(30.4%)であり、易のほうが難より1.5倍多い。つまりあまり難易という視点では英語をとらえていないばかりか5人に1人近く(18.8%)が易しいと思っている。反対に難しいと思う人は10人に1人程度(11.6%)しかいないことになる。

では同じバイ・マルチリンガルでも他言語を母語とするC:他言語+英語バイ・マルチリンガル話者はどのような印象を持っているのだろうか。

表14のようにこの人々は最も難易に言及する(45.63%)。しかし、4グループのなかでは難易間の差がそれほどない。難しいと思っている人々も多いが、易しいと思っている人々も多いのである。また4グループのなかではもっとも易しいと思う人々の比率が高い(26.21%)。

最後に英語がそれほど流暢ではないセミリンガルの人々の印象を表15に見る。

セミリンガル話者はこの4グループのなかでC:他言語+英語バイ・マルチリンガルに次いで難易に言及するが、A:英語モノリンガルの人々に次い

ニュージーランド・オークランドの多言語性と英語に対する印象

表 14 C:他言語+英語バイ・マルチリンガル（103人）の印象

印象		人数		比率	
		個別	グループ別	難易言及者(47人)に対する	他言語+英語バイリンガル話者総数(103人)に対する
易	easy	22	27	26.2%	57.5%
	simple	5			
難	hard	8	20	19.4%	42.6%
	complicated	4			
	difficult	5			
	complex	2			
	confusing	1			
計		47	47	45.6%	100.0%

表 15 D:セミバイリンガル（73人）の印象

印象		人数		比率	
		個別	グループ別	難易言及者（26人）に対する	他言語+英語話者総数(73人)に対する
易	easy	7	8	11.0%	30.8%
	simple	1			
難	hard	8	18	24.7%	69.2%
	complicated	7			
	difficult	3			
	complex	0			
	confusing	0			
計		26	26	35.6%	100.0%

で難しいと考える者が多い。

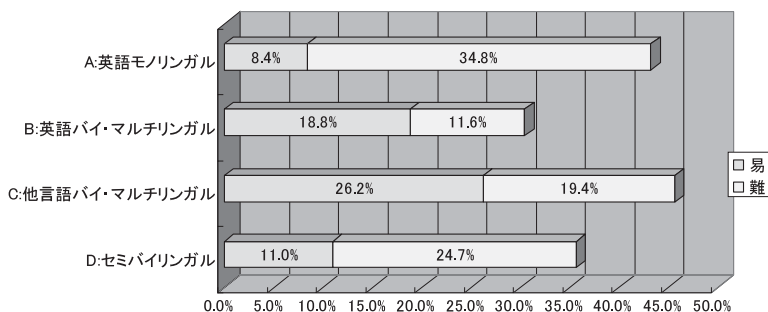
グラフ1はそれぞれのグループ総数に対する難易言及者の比率を表したものである。

このグラフからC:他言語バイ・マルチリンガルの人々が英語ももともと易しいと考え、A:英語モノリンガルの人々がもともと英語を難しいと考えている。

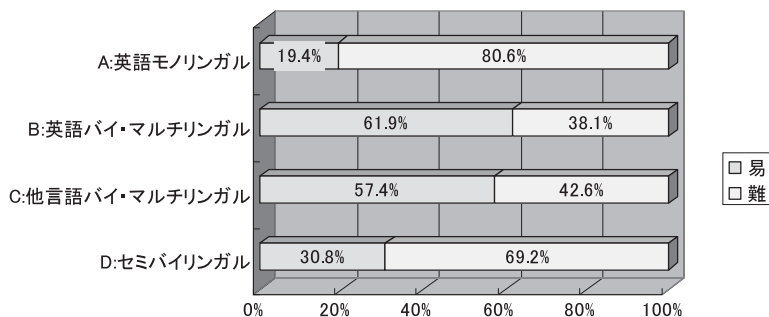
次にグラフ2に難易言及者内での比率を表した。

B:英語バイ・マルチリンガルはグループ内ではもっとも難易に言及することの少なかった人々ではあるが、言及者内での比率ではもっとも易しいと考える人々が多く、難しいと考える人々が少ない。C:多言語バイ・マルチリンガル者も同じような比率を示す。反対にA:英語モノリンガル、D:セミバイリンガル者は難しいと考える人々が多く、易しいと考える人々の比率が低い。バイリンガルである人々のほうが易しいと考え、モノ、セミリンガルの状況にある人々のほうが難しいと考えているのである。特に英語しか使用できない英語モノリンガル話者がもっとも英語を難しいと考えていることは注目すべきであり、これは日本語母語話者が日本語を難しい

グラフ1 難易言及者のグループ内比率



グラフ2 難易言及者内での比率



と考えていることに通じる。

英語が共通語である国、話さなければならない国、ニュージーランドにおいて、2つまたはそれ以上の言語をあやつるバイ・マルチリンガルである人々、英語をマスターしなければならないがバイリンガルになれないセミバイリンガル話者、英語のみでたりているモノリンガル話者、それぞれで「難」、「易」と考える理由は異なっているように見えるが、それは今後詳しく分析していきたい。

注

- 1) <http://www.stats.govt.nz/census/default.htm2007/09/13>
- 2) 広東語、北京語は中国語に含まれるが、回答者の記したとおりに分類した。
- 3) <http://www.stats.govt.nz/census/default.htm2007/09/13>
- 4) <http://www.auckland.ac.nz> 2007/09/13
- 5) <http://www.delna.auckland.ac.nz/about.php>

参考文献

- 早川治子 (2007) 「国語教科書における日本語 (1) — 中学文法事項の量的比率の変遷 —」『言語と文化』第19号文教大学文学部言語文化研究所 pp.52-69